

資

料

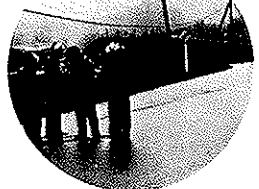
- 災害直後に発行された「広報しかおい特集号」縮小版
- 北海道地方治水事業促進大会における佐渡一男鹿追町長意見発表掲載記事

自然の猛威

未曾有の豪雨、恐怖の爪跡

昭和56年8月4日から同月8日にかけての
台風12号による北海道の大雨もたらした鹿追町内の災害状況

——詳しくは広報8月号でお知らせします——



冠水した路上で、足場を確保する
地元の人たちと消防団員。
(8月5日午後2時西畑町2号)



救済物資を運ぶ消防団員
(8月5日午後1時西畑町2号)



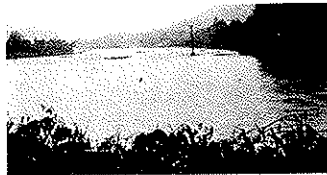
川筋を拡張させ、河川敷地にもしゅんじゅと水が押し
寄せてくる。
(8月5日午前10時方代橋上流)



橋々と水かさが増す秋田川
(8月5日午前9時方代橋)



増水した高水にもまける松野川の
中洲。
(8月5日午後1時日原橋上流)



「無様」に増水した
(8月5日午前9時30分
鹿追町2号)



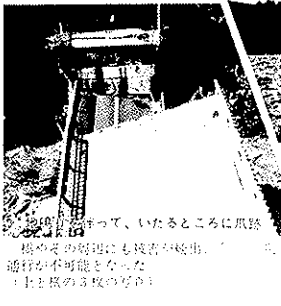
増水、猛威の爪跡、地盤がゆるみ、
壊れたものに大きな穴が……
(8月5日午前9時15分窪道橋)



崩壊して完全に押し潰された自然ラッ
プの一角。このままでは安全なところ
へ避難。
(8月5日午後4時)



(8月6日午前8時30分紅葉橋)



茶広方面への主道、跳道橋もろくろ
のようになり、通行不能

あつたといふまでに浸水、住民は必
ず身の安全を第一に確保する
(8月5日午後4時)

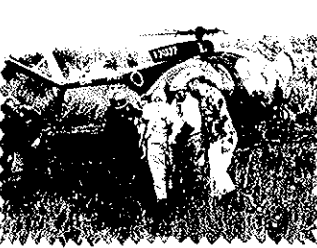


路肩が崩壊して決壊した道路
(8月6日午前6時20分
窪道橋)

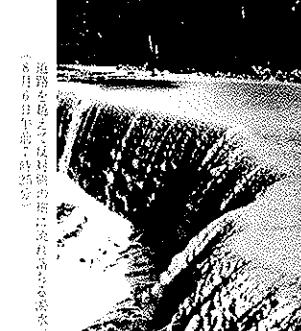


翌朝、早々秋田水が窪道川にも押し寄せ、必死で水を食い
止めようと懸命に土のうがけ。
(8月6日午前6時)

交通が途絶して孤立した野田原の自衛隊を、
ヘリコプター機に運ぶ自衛隊第8師団航空
隊
(8月7日午後3時15分秋田飛行場)



中洲に孤立した秋田県作業員を救助する自衛
隊第8師団と入隊員……夕陽まで待たされた。
(8月5日午後5時30分内川橋)
※写真提供～土橋毎日新聞社



道路を越えて、秋田県作業員を救助する自衛
隊第8師団と入隊員……夕陽まで待たされた。
(8月5日午後5時30分内川橋)
※写真提供～土橋毎日新聞社



川を化した道路を、緊急しなから進む中。
(8月6日午前6時15分窪道橋下流)

(昭和56年8月13日発行)



善更方面へ至る

もとの水流

掘地決壊部分

第六次治水事業五年計画の策定などを求める北海道地方治水事業促進大会が、昨年十一月開かれた。

北海道地方治水事業促進大会・意見発表

席上、昨夏の豪雨で被災した四市町村長が代表意見を発表したが、半世紀以上にわたって水害を受けたことのない

鹿追町の佐渡一男町長は、水害の恐ろしさと治水事業の一層の促進を強く訴える意見発表を行なった。

大会事務局の録音テープによる意見要旨を紹介する。

叩かれてその痛さを知る

鹿追町長

佐渡 一男

治水事業に関しての意見発表というのですが、実のところ、本年八月の12号台風で被害を受けるまでは、このような治水関係の会合に対して第三者的な感じ方もついていなかった。

た、というのが本音であり、誠に汗顔の至りであります。

と言いますのも、鹿追町は、河川氾濫による災害は大正十二年に一回あったということだけで、その後、豪雨による道路、橋などの被害が発生しましても極めて部分的なもので済んでいただけです。

全くの交通途絶

よって今回の台風12号及び15号による豪雨災は本町にとっても未曾有のものでありました。その雨量は、鹿追町の然別湖周辺で測定しましたが四〇〇ミリの超えております。本町内を縦貫する然別川は町管内の延長で二三・六キロありますが、

この全域にわたって堤防が壊れ、氾濫いたしました。その被害面積は然別川流域六、九一〇畝に及び、地域住民のみつめる中、次々と流失していった農地が七一畝。そのうち一〇畝が河川敷地だったので、私ども呆然として、なす術もなかったというのが実情であります。

また、本町内の然別川に架設されている一〇〇メートル以上の四つの長大橋が、橋脚は洗掘され、橋台は破壊されて、全くの交通途絶という大変な事態を生じたわけです。

いろんな報道関係で、日高管内の軽種馬等の被害が大々的に取り上げられておりましたが、道

道沿いの、水気などひとつもないようなところに建てられてあった豚小屋と、豚四十六頭が瞬時のうちに流されました。また、町管牧場の、常日頃は息せき切つて上がらなければならぬような急傾斜で、町で管理している乳牛が四頭、六キログラム下手の方に打ち上げられているという惨状でありました。

鹿追町は国道、国鉄のないマチであります。本町内を縦断して道道帯広然別線が走っております。この道道が水路のような状態になり、歩くことさえできないありさまでございました。しかも、鹿追市街は然別川から一・五キロほど離れておりますけれども、警報と同時に、

危ないから早く退避した方がいいと話し合っているその間に水が押し寄せてくるという勢いでした。学校の先生の奥さん方も、乳呑み児を抱いて役場庁舎に避難するのがやっとといった状況でした。

昔のことわざなのでしょうが、「叩かれて初めてその痛さを知る」叩かれた者でなければ、その本当の痛さを知ることがない。このようなたとえ話を聞いておりましたが、まことにわが鹿追町といたしましては、水の被害を受けて初めて恐ろしさを知った次第であります。

鹿追町を流れる然別川は、その源を名勝然別湖に発しております。しかし湖水は、昭和二十八年から発電用として取水利用されてきたため、然別川の流水はきわめて微々たるものであったというのが実情でした。その水不足のために地域全体が渇水現象さえ起こしていたのであります。このような状況の中で、私たち鹿追住民は、本当の水の恐ろしさを忘れていたと言えます。

総額230億円

この傍観的な私たちに対して、常に警鐘を鳴らし続けて

水防活動に懸命の住民



過去五年の総計上回る1,114億

56年災1～4次査定

道土木部は十二月上旬までに、四次にわたる五十六年災の公共土木施設災害査定を終えたが、同部のまとめによる一、四次の査定結果は八、二七八か所、総額一千百十三億九千二百万円、規模に達した。この査定額は、五十一、五十五年災の年間平均査定額（約百九十一億円）の五・八倍という空前のスケールだ。

土木部では融雪災害を中心とする第一次査定を皮切りに、十二月上旬までに四次にわたる五十六年災査定を実施してきた。第三次までの段階ではほぼ一十億円に達していた査定額は、第四次の約百十九億円が加わって、総額約一千百十四億円の規模にふくらんだ。これでも申請額（二千二百十八億円）に対して九一・四％の査定率である。所管別内訳は道工事が三、九三一か所、六百九十五億三千八百万円、市町村工事が四、三四七か所、四百八十八億五千四百万円。五十一、五十五年災のそれぞれのトータルより百五億円（道）、五十億円（市町村）上回る規模に達した。

また、五十一、五十五年災の年間平均査定額は道工事も百十八億円、市町村工事も七十四億円で、五十六年災はそれぞれ五・九倍、五・六倍に当る。

道工事の土現別内訳では、帯広土現が断トツ。一、四次の合計は五、六二か所、二百二十七億円で、査定額は道工事全体の約三三％を占めている。続いて札幌土現の九八八か所、百二十九億円（道工事の一八・六％）、室蘭土現の六七二か所、九十七億円（同一四％）など。市町村工事で日高支庁が一、〇四〇か所と千か所を越え、査定額も百三十四億円（市町村工事の三三％）に達している。そのほか空知支庁七七五か所、七十四億円（同一七・六％）、胆振支庁五四二か所、三十七億円（八・八％）、上川支庁三七五か所、三十四億円（八・一％）などが目立つ。

一方、事業別では河川が五、六四三か所、八百六十三億九千九百九十九万円と大半を占め、続いて道路が二、三〇〇か所、百四十八億九千六百万円の規模になっている。

過去5か年の公共土木施設災害決定額調

年災 箇所数 金額	51 災		52 災		53 災		54 災	
	箇所数	金額	箇所数	金額	箇所数	金額	箇所数	金額
道	908	10,562,516	1,093	11,522,616	838	11,130,301	1,116	14,539,173
市町村	772	5,666,808	1,064	7,677,705	897	7,132,817	1,096	9,810,070
計	1,680	16,229,324	2,177	19,200,321	1,735	18,263,118	2,212	24,349,243

箇所数	55 災		5か年平均	
	箇所数	金額	箇所数	金額
715	11,277,101	934	11,806,341	
664	6,523,983	903	7,362,276	
1,379	17,801,084	1,837	19,168,617	

56年災1～4次査定額

区分	箇所数	決定額
道	3,931	69,538,239
市町村	4,347	41,854,158
合計	8,278	111,392,397

くださったのが道の担当部局でございました。治水の必要性を説かれ、厳しい予算枠の中から、本河川の改修工事を継続し、上流部には砂防ダムを造っていただいておりました。その先見の明を私たちは一まことに恥しいことですが、何の役に立つのかと軽んじる傾向さえありました。今回、もしこれらの工事がなかつたとしたならば、その被害が倍加していたことは明白であり、慄然たる思いを禁じ得ないのであります。

現在、然別川は、災害の査定を完了し、復旧工事と同時に、関連助成工事の指定を受けるべく、関係方面に懸命の要請を傾中している最中です。その総額は二百三十億円をオーバーする巨額なものです。関係方面のご理解をいただけるよう、運動を進めて参る所存です。

「水を治めることは国を治める基本である」とこの原則は、古くして常に変わらぬ真理でありました。叩かれた痛さを自らのものとして感じ取る姿勢こそ、為政者のとるべき基本であります。昭和五十七年度は、国家財政の厳しさから、ゼロシロイングとして公共事業の抑制が噂されておりますが、国土を守り、日本を墳墓の地として生きる地域住民の希望のために、国が治水事業について後退することは断じてあってはならないのでございます。

第六次治水事業五か年計画の十二兆一千億円の策定につき、そしてさらに本日ここにスローガンとして掲げております数々の問題に對しまして私どもは、全力を結集しなければならぬと考える次第であります。

この第六次の計画につきましては、一年の大半を台風の猛威にさらされている日本国全体にとつては当然の内容でありませうけれども、とりわけ原始河川の多い北海道にとつて、しかもわが国の食糧基地としての存在意義を確立しつつある本道の将来にとつて、この計画策定の実行は極めて重要な意味を有するものでございます。人間の生命尊重と国土保全、つまり国の存亡を左右する重大な意義を有することを、国は確認していただきたいのであります。

人口七千人弱、国道、国鉄のない辺地、鹿追町ですが、日本国民として、北海道の一員として生きる希望を持つ権利はあります。私はいま、叩かれて知る災害の恐しさに開眼し、ご当局の先見の明あるご指導を受け、同友の先輩各位のご努力に負けることなく、歩みを開始することなく、決意を新たにいたしてまいります。治水事業こそ国政の基本でなければならぬ。そのための国の対応を強く要望して意見の発表に代えさせていただきます。

編集後記

「災害は忘れたころにやってくる」とよく言われますが、今次災害はその言葉通りでありました。大正11年にやはり然別川がはんらんし農地の流出・冠水といった被害を受けてから既に50有9年、先輩諸氏におかれましても記憶が薄らぐ遠い過去であり、ましてや私たちにとってはまさに未曾有の大災害でございました。

あれから一年、関係者皆様の鋭意努力を頂き本町の母なる川「然別川」の災害助成工事も着々と進められております。

私たちは今一度災害の恐ろしさを見つめ直し、この貴重な経験を後世に伝えるとともに、二度とこのような災害が起きないことを祈念し本誌を編集いたしましたのであります。

また、本誌の編集に当たり、資料、写真提供やご助言を頂きました関係各機関の皆様並びにご協力頂きました町民の方々に深く感謝を申し上げます。

昭和57年9月

昭和56年8月豪雨 災害記録集

発行 昭和57年9月10日
発行所 北海道河東郡鹿追町役場
編集 鹿追町役場企画住民課
印刷 大同出版紙業株式会社
(帯広市西7条南6丁目)